



今回は国語科の柴田先生です。読書について、読む目的によって三つにジャンル分けし、それぞれに紹介していただきました。バランスよく、それぞれの目的に合った読書は楽しみを広げます。

読書について

国語科 柴田秀作

私の今までの読書を振り返ってみると、大きく三つに分けることができるように思います。一つ目は、仕事で読まなければならない読書です。二つ目は、軽く楽しく読みたいと思って読む読書です。三つ目は、すでに読んだ本を読み返してみたくなり読む読書です。この三つを「読まねばならない読書」「軽く読む読書」「読み返す読書」とでもいいでしょうか。この中からそれぞれの読書を通して1冊ずつ、3冊の本を皆さんに紹介してみたいと思います。

まず「読まねばならない読書」の本からは、原田種成『私の漢文講義』を紹介します。



漢文の学習については、漢文の訓読、返り点、書き下し文、再読文字、置き字など基本から丁寧にわかりやすく説明されています。特に、漢字や熟語について『鴻門の会』の「沛公」の「沛」の字の画数は7画で「市」

は、なべぶたではなく縦線が上から下へ貫いているので「点」は間違いだとか。「日ハク」は(ひらび)で口を開けて声を出している意味で、「日」(ひ)とは全く別の字であるとか。また、「私淑」という言葉は、会うことのできない人を敬慕するのに使いますが「イートンのような学校では、…生徒はつねにその先生に私淑しているうちに、いいしれぬ感化を受けるのである」と国語教科書の文章で誤用に気づかず掲載されているとか。以上はほんの一例にしか過ぎません。私はこの本を読んで漢文の授業にかなり役立てることができました。このほかにもいろいろなおもしろい例がたくさん紹介されていますので、漢文が苦手な人は是非読んでみてください。



次に「軽く読む読書」の本からは、椎名誠『活字の海に寝転んで』を紹介したいと思います。

とにかくおもしろい。エッセイ風に書いているので読みやすい本です。食べものに関するエッセイが中心で、それと合わせていろいろなおもしろ本が紹介されています。話題は食べものと旅で感じたことなので読み出したらとまりません。例えば、辺境の食卓では、アマゾンの

人生は短し書物は厳選せよ『読書論』柴田秀作

人々が猿を食うときは首と足の付け根のところにあるリンパ腺のような臭い袋を傷つけずに最初に取り除くのがコツであるとか。漂流記には、輪に漏斗状の絹の網をつけたものを流してプランクトンを集め食べた話、匂いは悪いが味が匂いの埋め合わせをしてくれるなど辺境地帯や極限状態に置かれた人間が何をどうやって食べて生きてきたか。また、インド人が手で食べるのは、まず、手でその食物の固さ、柔らかさ、温度、粘りけ…を味わい、その後口でもう一度味わうためだとか。モンゴルにはジンギスカンという料理はない、モンゴル人は絶対に肉を焼かない、肉と内臓をとにかく煮てしまう。味付けは塩だけであるというように、特に一般の人がなかなか行かないようなアマゾン、北極、南極大陸、大草原、大砂漠…など、実際に世界の辺境を旅した実体験を踏まえて食べものと旅で感じたことが魅力的に綴られています。おもしろくて楽しく読める本です。

最後の「読み返す読書」の本からは、小泉信三『読書論』を紹介しま



す。私が大学生の時に『文学概論』の講義で使った本です。今では表紙も汚くなって傷んでいて、ページを開くと紙の端のところがうっすらと黄色になっています。それがまた私にとっては何ともいえない味わい深いものになっています。この『読書論』の本文には、講義中に鉛筆で()を記入しています。例えば(難解な箇処に出逢っても、それに辟易しないで読み進むこと)(名著はその全巻を読みおえないと真意を掴むことはできない)(偉大なる作家思想家の大著を潜心熟読することは、人を別人たらしめる。)(明窓浄机というが、朝の間の書齋で塵を払った机に向かえば、文字の意味は吸い込むように胸に入り、いくらでも思想が湧いてくるような気がする)というような箇所です。この本を読み返している時、読書に対して真摯な気持ちになれると同時に不思議なもので40年前の学生時代にタイムスリップしたような感覚を覚えます。この感覚を味わいたいがために、この本を机にいちばん近い書棚に立てていつも読み返しています。この本は、読書を通じた教養論としての意味合いが強く「卑近な意味で実用に役立つ書籍は、吾々の精神的栄養を増してはくれぬ」と述べ、おもしろさ、分かりやすさを本に求める昨今の風潮に対して警鐘を鳴らしています。また、難しい古典とぶつかり、自分自身と戦いながらする読書によってこそ自己を高めることができると述べています。さらに、このような読書によってのみ読書による小恍惚の体験を得ることができ、人生を豊かなものとできると述べています。この本を読んだ後の感想を是非みなさんに聞いてみたい1冊です。

小泉信三は、書籍の選択について「良書を読むには悪書を読まぬことを条件とする。人生は短く、時と力とは限られているから」と述べています。春秋に富むみなさんとは違って、今の私にはこの言葉が、特に感慨深く感じられます。